

序章

・研究目的

建築の再利用行為とは「建物の時間を進めていくための行為」であるが、その明確な手法がないことから建築の再利用行為にはオブジェクトに頼る現状が散見される。こうしたオブジェクトは腐朽していくものであり、オブジェクトをリソースとする再利用行為は建物の時間を進めるのに適していないと考えられる。その為、オブジェクト以外に再利用可能なリソースを発見することで、住宅の再利用行為の明確な手法を明らかにすることが本論の最終目的である。

・研究方法

本研究では、第1章で取り残された住宅の再利用についての本論での定義を確認し、第2章で定義をもとに取り残された住宅の再利用のリソースを明確にする。第3章では住宅の再利用事例を調査することで、前章で発見したインテンションを用いた再利用手法を提示する。第4章では、対象住宅に関するインテンションをあげ、第5章で実際に取り残された住宅の再利用を行う。

第1章 取り残された住宅の再利用

1.1 取り残された住宅とは

多木浩二は著書「生きられた家」で住宅を「ただひとりの個人によって経験される次元だけでなく、人間という種によって作りだされ、種の存在にとって欠かせない超複合的なシステム」であると述べている。住宅とは複雑極まりない事象を内包するものであり、取り残された住宅もそれらを内包していた器であったのだ。つまり取り残された住宅は「粗大ごみ」ではなく、「宝箱」と言っても過言ではないだろう。

1.2 建築における再利用とは

加藤耕一の著書「時がつくる建築」において既存建物への3つの態度として挙げられている「再開発」「修復/保存」「再利用」があると述べている。「再開発」とは破壊して新築するという行為のことを指し、建物の時間の流れをリセットしている。一方で「修復/保存」は、歴史的建物が、経済主義の波に飲み込まれないように対抗する方法であり、後世にそのままの姿を伝えることを目的としており、建物の時間の流れを止めている。

上記2つの既存建物への態度に対して「再利用」は、既存の建物を継承することで先人たちの思いを引き継ぎ、更新することで今後も使われていく方法を目指す、建物の時間を進めていくことである。

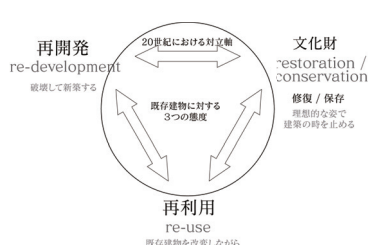


fig1. 既存建物に対する3つの態度

1.3 取り残された住宅の再利用とは

前節における多木浩二、加藤耕一の言説をもとに、取り残された住宅の再利用とは、「自然や物、社会や個人、物や言葉などの関係性から生まれてくる要素」を内包する住宅から、そうした要素を「継承」しながら、新しい生活状況に合った「更新」をすることだと定義した。

第2章 “インヴィジブル” なリソース

2.1 流行する再利用

2.2 再利用するリソースの模索

現在の建築の再利用は柱や梁といった、目に見えているオブジェクトをリソースに頼った事例が大半である。著者はオブジェクトは腐朽していくので、それに頼る再利用に将来性はないと考えた。そこで目に見えない、インヴィジブルなことについて調べていくなかで、宮本佳明の著書「環境ノイズを読み、風景をつくる」に出会った。彼は新しい状況が生み出される際、先行している状況と複雑に絡み合い衝突しながら、現在の風景が生まれてきたことを示唆している。こうした先行している状況がリソースになりえると推測し論考すると、先行している状況には意図が含まれており、また先行している状況に加えられた意図を通して、私たちの記憶が形成されていることがわかった。そして第1章から分かるように、取り残された住宅には、暮らしてきた住人たちや周辺環境、その地域に暮らしてきた先人たちの「意図」によって生み出された「先行している状況」が眠っているのだ。

2.3 インテンションとは

本論で述べている『インテンション』は人間が暮らしていく中で発生する「見えない痕跡(時間の流れの中身)」である。「見えない痕跡」とは、先人たち、もしくは自然の意図、意向、意思のような欲求から生じる、先行している「状況」を指し、インテンションが、私たちの心に残っている「思い出」を形成している。つまり、本論が提案する取り残された住宅の再利用の手法は上記で定義したインテンションを紐解き、それを編集すること(意図を込めること)である。例えば、ある人Aが生み出したインテンションに対して、ある人Bが意図を加えることである。そして将来、Bが生み出したインテンションに、別の人が意図を加えて住宅の再利用を行う。

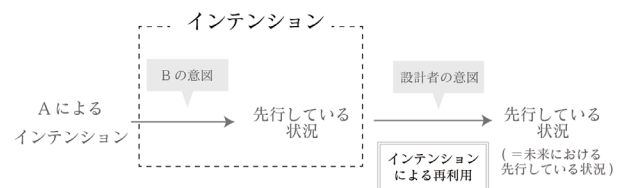


fig 2 インテンションを用いた再利用方法

またこうした観点から、再利用を見ていくとインテンションが二種類に分けられることが分かった。一つ目が「茗荷谷の舎」などで見られる暮らしてきた家族、そこに訪れていた親族や設計者など特定少数のわたしたちの痕跡である。二つ目が「土蔵と補う増築」などで見られる、住宅が建つ地域に暮らしてきた先人たちや、その地域の地形などを形成する自然など不特定多数のわたしたちの痕跡である。

本論では前者のインテンションを『私史インテンション』、後者のインテンションを『歴史インテンション』と名付ける。



fig 3. 茗荷谷の舎



fig 4. 土蔵と補う増築

第3章 インテンションの活用手法

住宅の33件の再利用事例の分析を通して、インテンションの活用手法が8種類あることが分った。その内訳として歴史、私史インテンションにおいて共通する手法が4種類、歴史インテンションのみにある手法が2種類、私史インテンションのみにある手法が2種類ある。

歴史、私史インテンションに見られる手法

- **A@a → A@a** Aというインテンションに対して「そのままの状況にしておく」という意図を加えることで、Aというインテンションを再利用以前と同様に存在させる手法。
- **A@a → A@b** Aというインテンションに対して「そのままの状況を別の場所に移動させる」という意図を加えることで、Aというインテンションを再利用以前と同様に別の場所で存在させる手法。
- **A→A'** Aというインテンションに対して「Aは現在のライフスタイルには適さないので、現在のライフスタイルに適した状況に進化させる」という意図を加えることで、Aというインテンションを現在のライフスタイルに適応させる手法。
- **A→B(≒A)** Aというインテンションに対して「Aを想起させるような、異なるBという状況を持ち込むことで以前の状況を思い起こさせる」という意図を加えることで、AというインテンションをBというインテンションに置き換える手法。

歴史インテンションのみに見られる手法

- **0→A** 対象住宅、敷地には存在しないが、その地域に存在するAというインテンションを「地域の良さを対象住宅、敷地に持ち込むことで住環境をよくする」という意図のもと、Aというインテンションを新しく対象住宅、敷地に持ち込む手法。
- **A→・・・→B→A'** Bという現インテンションに対して「超先行している状況であるインテンションAを復興することにより、その地域特有の暮らし方や風景を思い起こさせる」という意図のもと、超先行しているインテンションAを現在のライフスタイルに合わせたインテンションA'として呼び起こす手法。

私史インテンションのみに見られる手法

- **・・・→ A → B** Aというインテンションに対して「A以前のインテンションにαという意図が加え続けられてきたことから、αという意図を途切れさせない」という意図を加えることで、Aというインテンションにαという意図を加える手法。
- **A,B→A+B** AとBというインテンションに対して「それぞれ異なる状況であるAの良さ、Bの良さを用いていることで、より良い状況をつくる」という意図を加えることで、A、Bというインテンションを融合させる手法。

第4章 インテンションの抽出

4.1 歴史インテンション 小坂町

小坂町にある歴史インテンションを調査し、以下のような歴史インテンションを導いた。

- 夏は涼しく、冬は寒い
- 森林を活かして暮らしてきたこと
- 水源が豊富であること etc...



fig 5. 下呂市小坂町

4.2 私史インテンション 祖母の家

祖母の家にある私史インテンションを調査し、以下のような私史インテンションを導いた。

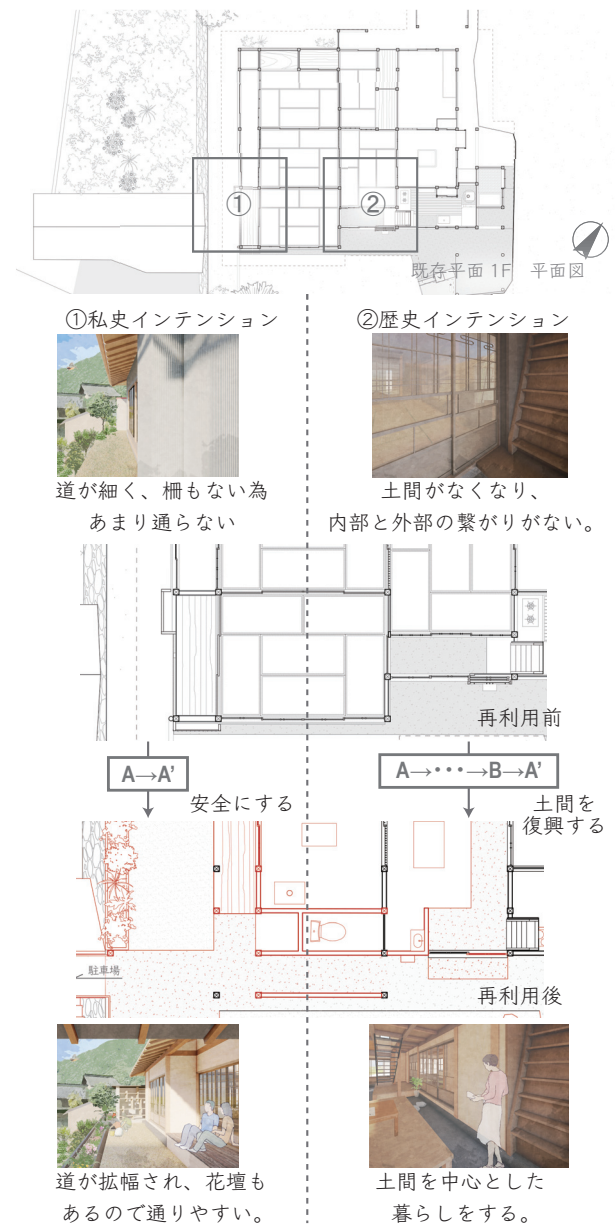
- なかのまに入る西日が暖かい
- 風呂場は寒く、脱衣所もない
- お墓までの道が狭い
- 風呂場が寒いこと etc..



fig 6. なかのまに入る西日

第5章 設計提案

第4章で調査した歴史インテンションと私史インテンションに、第3章で発見したインテンションの活用手法を用いることで、祖母の家を再利用した設計提案を行う。下図に一部を示す。



終章

インテンションを用いて住宅を再利用することは、一つ一つのインテンションに対して応答していくといった、一見すると統一性のない手法に思われるかもしれない。しかし、そこには先人たちが積み上げてきた礎のもと築き上げられる「現在を生きる私たちのライフスタイル」という統一された背景が存在しているのだ。今後、インテンションという考え方が、建築の再利用時における一つの指標として用いられることを期待する。



主要参考文献
時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史 (著: 加藤耕一 出版: 東京大学出版会)
環境ノイズを読み、風景をつくる (著: 宮本佳明 出版: 彰国社)
住宅特集 (出版: 新建築社)